

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：12606

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580030

研究課題名(和文) ホームムービーを活用した新しい芸術表現に関する研究

研究課題名(英文) Study on new art expression that utilized home movies

研究代表者

三好 大輔 (Miyoshi, Daisuke)

東京藝術大学・美術学部・講師

研究者番号：70648443

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：昭和時代に記録された私的な記録であるホームムービーを、社会で共有すべき公的な文化資源として位置づけ、それらを活用する「地域映画」という手法を開発し長野県安曇野市を対象に実践を行った。「地域映画」とは「地産地消の映画づくり」である。地域で掘り起こされたホームムービーや地域の方々のインタビュー、童謡や唱歌などの合唱や演奏など、映画に必要な要素を地元住民たちで担い多世代が参加した。完成した地域映画「よみがえる安曇野」は市内の公民館や学校の授業ですでに30カ所以上で上映が行われている。本研究により「地域映画」という手法はホームムービーと地域住民を結びつける方法論として有効であることがわかった。

研究成果の概要(英文)：I developed public culture resources and the technique called "Regional Filming" which I did it, and utilized positioning, them that you should share in society and practiced the home movie which was a personal record recorded in the Showa era for Azumino-shi, Nagano. "Regional Filming" "is the making of movie of the local production for local consumption". I carried the element which was necessary for a home movie and the movie including a chorus and the performances such as the interview of local people, nursery rhyme or the song dug up in an area in local people, and many generations participated. "Reviving Azumino" is a class of a public hall and the school in the city, and a finished area movie is already 30 places or more, and the screening is performed. The technique called "Regional Filming" understood an effective thing as methodology to join a home movie and local inhabitants together by this study.

研究分野：芸術表現

キーワード：アーカイブ 地域活性化 社会的デザイン ホームムービー 映画 8ミリフィルム 地産地消 文化資源

## 1. 研究開始当初の背景

これまで映像分野におけるアーカイブ(収集・保存・修復・活用)は「映画」や「テレビ」など、商業的なものを中心に行われてきているが、昭和初期から昭和50年代まで日本国内外で幅広く一般市民の映像記録として普及したホームムービーは、私的な記録であるが故に十分なアーカイブがなされていないのが現状である。押し入れにしまわれたまま死蔵されているのがほとんどであり、保存・管理の状態は良好とは言えない。経年劣化によるビネガーシンドローム(酸化現象)や映写機の故障、フィルム所有者の高齢化、引越の際の破棄などの要因も加わり、フィルムの保存そのものが危機的な状況にある。一方で、ホームムービーには地域の生活に根ざした文化風習や人々の営みが克明に記録されている。そこには祭りや文化行事などその土地に関係したものから、運動会や七五三、旅行記などの個人的な映像、子供たちを役者にして制作された自主映画、地域の祭りを克明に記録したものなど、様々な切り口の映像が存在している。この個人的な市民の記録が、撮影から数十年の時を経て、「私的」なものから「公的」な社会性をもった歴史的史料として利用価値の高い映像へと変化してきている。個人で所有している家庭の記録は、社会的な文化資源としての価値への転換が可能であり、学校教育や回想法などへの活用が求められている。そのためには新たな芸術表現として再構築する必要があり、人々が「共感」し「感動」を共有することで、次世代への継承を可能にするのである。本研究では、ホームムービーに新たな価値を見出すと共に、社会の共有材として有効に活用するために、音楽や言葉、効果音など、複合的な要素を映画というフォーマットに編み上げる芸術的なアプローチで研究を進めた。ホームムービーに映されているのは、マスメディアでは捉えられない人々の暮らし

や文化風習を生活者の視点から見た社会である。文字や写真でしか知り得なかった事象も、映像という動的資料として知ることが可能となる。これらの集積により初めて地域教育や民俗学、回想法、医療福祉の分野での活用も考えることが可能となるのだ。ホームムービーという無限の可能性をもった地域資源の活用は、社会的意義を多分に持っている新たな文化の創造である。

## 2. 研究の目的

ホームムービーを地域で活用するための方法論の研究を目的とする。家庭用の8ミリフィルムやビデオテープなど、家族や個人で楽しむプライベートな記録は、文化的価値が定められていないが、そこにはマスメディアでは捉えきれない地域に根ざした固有の文化風習、生活習慣、風俗、今では失われてしまった景色や街並などが数多く記録されている。この「私的」な映像を社会で共有すべき「公的(パブリック)」な文化資源と位置づけ、それらを収集・分析・分類し、学校教育や回想法に活用していくための方法論を研究する。



## 3. 研究の方法

(1) 全国に点在している地域映像アーカイブの現状をリサーチし、ホームムービーを活用するための方策を検討した。その結果、対象地域を市町村などの自治体規模に限定することで、掘り起こしから活用までの方法を、

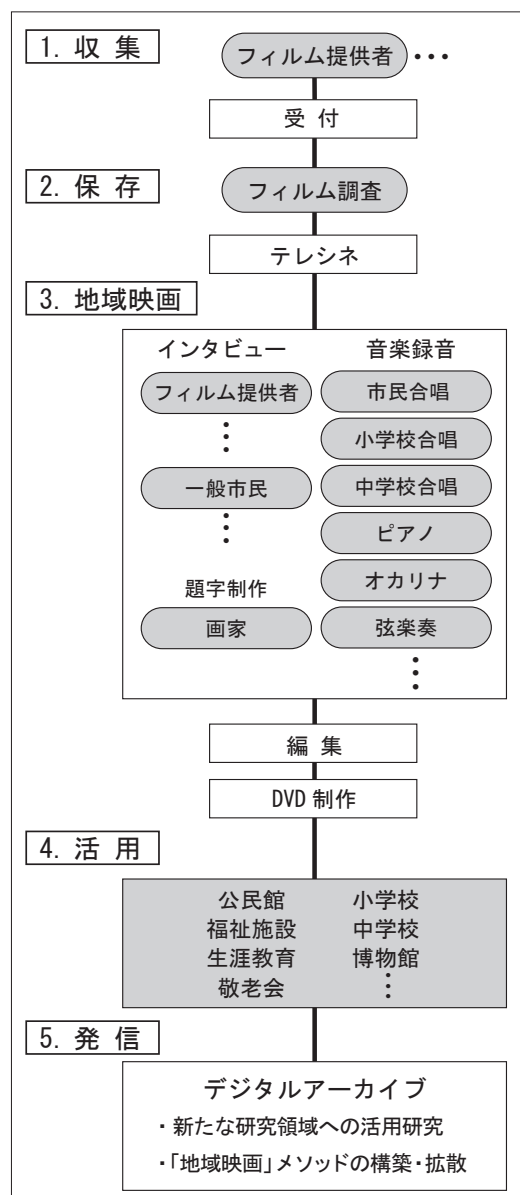
実践を通して構築することが可能と判断し、研究代表者が居住する長野県安曇野市を対象に研究を進めた。収集するホームムービーは、主に昭和30年代から50年代初頭にかけて市民に親しまれてきた8ミリフィルムに限定した。昭和50年以降に記録されたビデオテープは、その対象が広くなりすぎることから今回は見送ることにした。8ミリフィルムは撮影から数十年の時間を経ているため、歴史的価値が期待出来ると共に所有者・撮影者の高齢化が進んでいる現状から、早期に収集を進めることが必要であるのも理由である。

(2) フィルムの収集は安曇野市と協働で行った。提供者のところへ直接伺い、フィルムの状態や記録された時のことをヒアリングし、預り証を交わしフィルムを預かった。収集したフィルムは、1本ずつ調査票を作成し、フィルムの管理のためのデータ作成を行った。簡易的なクリーニングを行い、映写機を使いデジタル化を行った。作成されたデジタルデータを元に、撮影内容、年代、場所などの詳細なデータを調査票に記入した。

(3) 撮影者や関係者を映像と音声によるインタビュー取材を行い、フィルムに記録された内容について話を伺った。また、映像の裏側にある時代背景や意味をお話し頂くことで、映像に記録された事象を深く理解するための手立てとした。

(4) 音楽の録音は、全て市民に委ねることにした。童謡や唱歌など、その土地で歌い継がれてきた音楽やその土地ゆかりの音楽家の歌曲を、小中学校の合唱部や市民合唱団が歌い、市民音楽家が演奏した。映像提供だけでなく、合唱など幅広い市民を対象にした場づくりが重要と考えた。市民一人ひとりが過去の土地の記録を自分ごととして捉え、過去の記憶を、フィルムを通して未来に繋げていくきっかけ作りとなる場の創出により、多くの市民が能動的に参加することが可能となっ

た。映画づくりへの参加だけでなく、視聴することによる記憶の回想が生まれたことは大きな収穫である。



(5) 収集したフィルムとインタビュー、音楽を編集し1本の映画作品を完成させた。編集には「土地の文化風習がわかりやすく伝えられるもの」「今は失われてしまったもの」「当時の暮らしが色濃く映されているもの」を中心に選んだ。また、映画として最後まで観てもらえるように、緩急織り交ぜながら、映像、インタビュー、音楽をバランス良く編集した。題字の文字は地元の画家に依頼し制作した。また、映画の最後にスタッフクレジットそして参加した全ての市民の名前を記載。140名の名が映画のスタッフとして刻まれた。完

成した映画の上映会には300名を超える市民が参加し、昔懐かしい風景を観ながら感嘆の声を上げていた。アンケートには「何気ない普通の結婚式に心が温まり涙した | 日本の原風景がある | 風景と共に生活そのものが安曇野の文化であると感じた | 失われた心の豊かさが幸せの源にあることを認識できた | 人々の細やかな気持ちまで感じられ興味深く拝見した | 懐かしく涙が出た | 若返ったひと時だった | 自分の記憶ではないのにとっても懐かしく素晴らしかった」と、過去を深く回想している様子を伺えた。



#### 4. 研究成果

長野県安曇野市を対象に行った研究により生み出された手法を「地域映画」と名付けた。これまで「地域映像アーカイブ」という呼称で活動を進めていたが、「アーカイブ」の持つ意味の多様性から、活動そのものを誤解されることもあり、活動の意味を明確にする意図もあった。「地域映画」とは「地産地消の映画づくり」である。地域で掘り起こされたホームムービーを元に、地域の方々のインタビュー、童謡や唱歌などの合唱や演奏など、映画に必要な要素を地元住民たちで担った。一人でも多くの市民に関わってほしいとの考えから、参加者は小学生から80代の方々まで、世代を超えた場となった。完成した地域映画「よみがえる安曇野」は地域住民が過去の地域の記録を自分ごととして考えるきっかけづくりとなり、市内の公民館活動や学校の授業で上映が行われるようになった。自

治体が運営する出前講座では86講座の中で1番人気となり市内30カ所以上で上映され好評を得ている。映画の完成から9ヶ月で視聴者は1,200名を超え、未だその数を伸ばしている。市民による記録が地域に還元されていくことにより、記録と記憶の循環が生まれ、次世代へ地域の暮らしを伝える手段として役立てられ始めている。掘り起こされたフィルムをありのまま伝えることがアーカイブ機関の役割だとするならば、本研究で開発した「地域映画」は、地域の記憶の掘り起こしと同時に、地域住民を結びつける社会的デザインを兼ね備えた方法論として有効であることがわかった。国内のみならず世界的にみてもホームムービーの保存活用の有効な方策が見いだせていないのが現状である。その中で、地域活性化と結びつけた「地域映画」は、ホームムービーの利活用のための新たな形として大きな役割を果たすと考えられる。この地域映画をきっかけに、今後は、民俗学や回想法、デザイン学、デジタルアーカイブなど、異分野の研究者との共同により、収集した映像の新たな活用を探っていくことがホームムービーを地域の文化資源として定着させていくためには必要である。市民の市民による市民のための映画づくりは、今すぐに進めなければならない。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[その他 計2件]

##### ① 三好大輔

地域映画づくり：

ホームムービーを映画にする仕組み  
～8ミリフィルムが記録した暮らし～  
日本デザイン学会  
デザイン学研究作品集 2016 No. 22

② 三好大輔

「地域映画のつくり方」

京都映画芸術文化研究所

2016年10月29日

招待講演 おもちゃ映画ミュージアム

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三好大輔 ( MIYOSHI DAISUKE )

東京藝術大学・美術学部・講師

研究者番号：70648443